

「私たちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。…」

ヨハネ 4・42

カレンガ神父

ご承知の通り、キリスト教は聖書を土台としています。聖書はイエス様についての物語だと言えます。前教皇ベネディクト 16 世は、「教会は、聖書の中にキリストが生きておられる」ことを伝えています。それ故に『啓示憲章』が述べているように、教会は、主のからだとを敬うのと同じように、常に聖書を敬ってきました。

だから、この公会議文書が引用しているように、聖ヒエロニモは、「聖書を知らないことはキリストを知らないことである」と言ったのです。

これは、聖書全体が人となられた神の子キリストを指し示していることを公言しています。その点で、キリスト教における聖書は、ユダヤ教やイスラムにおける聖書とは根本的に違った意味を持っているのです。この聖書のことばを理解するために、霊的読書「lectio divina/レクチオ・ディヴィーナ」という古代の伝統の聖書の黙想が役に立ちます。誰でも、神の言葉をじっくり味わい、霊的な糧を豊かに得ることができると思います。聖書の中に生きておられるイエスという泉からみことばを汲むことによって、共同体の成長と自分の成長に繋がるのです。

私たちの多くは、成長を自立と間違えて理解しているようです。インターネットで意味を調べて見ましたので紹介します。皆さんの思っている考えと比べてみてください。

「自立とは、自分のことは自分です。自己責任で生きる。働かざるもの食うべからず。

好きなことをしていいが他人に迷惑をかけない。」

「成長とは、昨日の自分を超越ること。人と比べない。できないをできるにする。」

私たちは、キリスト者として、聖職者、信徒、子供、お年寄り……、如何なる人であろうと、常に成長するように招かれています。その成長は、永遠の新しさと言ってもいいと思います。神様ご自身がいつも、私たちに成長させ、新しくしてくださるのです。どれほど老いても「新たな力を得、驚のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない」(イザヤ 40・31) のです。

年を重ね、暗い時代や教会の弱さを経験している私たちと共に、キリスト教のメッセージが古くなることも弱くなることも決してありません。

一方、「自立」は聖書の中で見れば成長の理解に近づきます。聖書でいう「自立」は、サマリアの女とイエスとの出会いの物語から見えてきます。

「宣教師であり、司牧者とされたサマリアの女」は イエスのメッセージを「宣教地にいる村の人たち、つまり信徒」に告げ知らせます。「村の人たちである信徒」はそのメッセージを受け入れると同時に、その宣教師である司牧者に反対せず、むしろ、その宣教師を超えて、泉であるイエスのもとからみことばを汲むのです。そこで、村の人々の信仰の成長につながりました。

「私たちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。私たちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです」(ヨハネ 4・42)。

物語を通して読むと、宣教師が語ったメッセージと、村の人々が自分たちの耳で聞いたメッセージは同じだということがすぐに分かります。

それは「昨日も今日も、また永遠に変わることはない神の言葉だからです」(ヘブライ 13・8)。

「あの神父はこう言った…」というような態度だと、たとえ司祭の言ったことが正しいことであっても、成長している、または、聖書的な自立をしているとは言えません。

司牧者を無視して、信徒だけで物事を決めるという態度も同様と言えるでしょう。この態度は聖書の教えでもなければ、第二バチカン公会議の教えでもありません。

第二バチカン公会議の精神のもとで、私たちに勧められているのは、教皇フランシスコが言うように、自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すことです。この課題に対して、大胆かつ創造的であることです。そんな中で、大切なことは、独りで歩まないことです。常に兄弟に頼り、特に司牧者の指導のもとに、賢明で、現実な司牧的識別を行うことです。

また、イギリスのキャメロン首相のスコットランドランド独立支持者へのこの言葉を心に留めたいと思います。

「もし私のことが嫌いでも、私は永遠に首相ではない。現政権が嫌いでも永遠に続かない。しかしあなた方がイギリスから去ったら、それは永遠に続くことになるのです。」

変わるもの、司牧者や役員に執着せずに、また、その変わるもののために働くのではなく、いつも永遠に変わらないもののために働き、また、その本質に執着しましょう。私は愛をもって、このことを中ブロックの皆さんに、強く勧めます。

ここでも、イエスとの個人的な出会いが必要です。イエス様に出会った人々が作る共同体は魅力です。「ウェルカミング共同体」になることができるのです。帰って来た放蕩息子がすぐに入れるような共同体です。そのような共同体づくりに共に貢献できたらと思います。